

第五回星野立子新人賞

「静かな器」

金澤 諒和

猫すべて貰はれゆくや春の雪
みづからの光を流れ春の川
流し雛きのふの雨に流れをり
春塵や玩具に長き眠りあり
馬の仔に大いなる影付いて来し
あたたかや象に乗つたといふ記憶
音立てず僧の飯食ふ初桜
休日も早や終りかな花の雨
沈丁のひと雨ごとにはぢけたる
葱坊主甘やかされてをりにけり
鶯餅つまむネクタイ啞えつつ
うたかたの影したがへてしやぼん玉
うららかや虚子の呉れたる日と思ふ
音楽となるみどりごや風光る
をさなごの蹠やはらかみどりの夜
燕の子濡れたる顔を上げにけり
梅雨晴れやふうつくらとして鳥の腹
万緑や母が眠れば子も眠る
明易や歪みしままのナース帽
掬ひたる金魚突然生き返る
母といふ静かな器白日傘
梅雨深し舐れば苦き糖衣錠
空蟬のなほ今生にしがみつく
全身を滝の落ちゆく滝の前
衰へてゐる臍ひとつ冷奴

蝉落ちて蝉の重さとなりけり
地球儀の埃まみれの帰省かな
辛うじて立つ向日葵やなほも風
人影は人を語らず原爆忌
蛸や一枚の空暮れ残る
月光へファックス舌を吐き出せり
秋桜一瞬風を見失ふ
木犀に顔洗はれて出勤す
曼珠沙華梵鐘未来より響く
秋出水棚田百枚くつがへす
飲食の卓に書を積む秋灯
雲が雲払ひ運動会の空
不器用な盃が良し新走り
啄木鳥や一樹に高き空のあり
ネクタイを棄ててしまえば秋の風
半島は孤島のごとし帰り花
外套やきのふの父を知らぬ朝
竜の玉母が全てでありし頃
新しき畳の匂ふ除夜の鐘
初夢に古りし故郷や今も古る
凍蝶の重さ加えて茎撓る
かんはぜを朝陽に晒し寒鴉
冬菫あえかなる場所
竹馬の子の遠山を見てゐたる
砂山の手形も春を待ちにけり